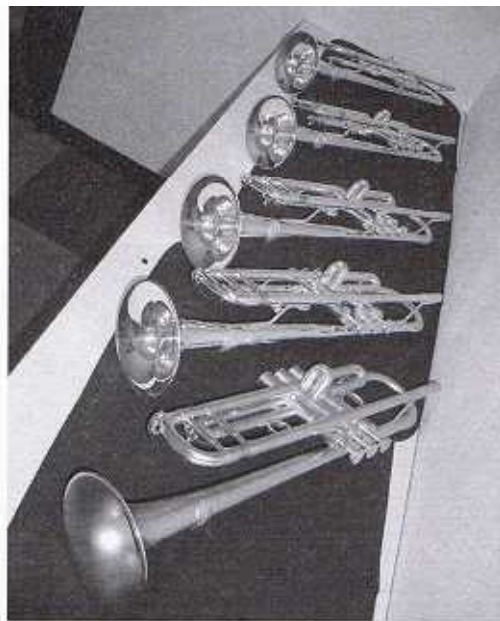


よりよき音色を求めて

# for Better Sound Creation

取材協力: トランペットステーション、  
モントレー国際音楽フェスティバル



YOKAN氏好みの順は、手前から501G、106S、303S、206S、106S…しかし、501G以外は、おそらくこの写真ではまったく見分けがつかないはず

本誌新企画「族のかんたんレシピ」でもその異才ぶりをいかんなく発揮している快傑YOKAN。木管金管なんでもOK!という天才だけど、本業はやっぱりトランペット。今回はトランペットばかりがずらり並んだ「トランペットステーション」で、BSC(Brass Sound Creation)に挑戦していただきました

## どれを見ても、まったく見分けがつかない…

なんとそのプロ経歴は、すでに20年以上。同じ世代のミュージシャンはキャバレー全盛期や米軍キャンプ時代をほとんど知らないのに、YOKAN氏の場合はひと世代前の先輩とともに、まだナマ楽器があふれていた「キャバレー」(今の「それ」とは大違いな、大人の社交場だったんですね)で、トランペッターとしてそのキャリアを開始したという、外見に似合わない?大ヴェテラン。スタジオの仕事がきっかけでマルチに開眼

して、現在では大塚愛や堂本剛など、さまざまな一流ポップアーティストのステージや録音でさまざまな楽器を手で大活躍しているのが、今回ご登場いただくYOKAN氏。ソプラノからバリトンまで、そしてトランペットからチューバまでのすべての金管楽器、さらにはドラムやギター、ベースまでこなしてひとり多重録音でビッグバンドを録音する…なんて仕事は「朝飯前」…はさすがに無理にしても、文字通りの「早起き」で、普通のひとが朝ごはんを食べる頃にはひと仕事終わっている、というのもよくある生活パターン、だそうです。

## あ!わたしの セレクトがGOOD だったんですね!

その代わり、普通のひとのように楽器屋をひやかしに歩く?ような時間もないのが、人気ミュージシャンのつらいところ。本来は楽器マニアで、伝説のモデルや楽器の改造にも造詣が深いYOKAN氏、本当は楽器屋めぐりもじっくり楽しみたいみたい。なので、トランペット関係ばかりずらり並んだ東京・渋谷「トランペット・ステーション」にお連れしたところ、山のように並んだ名器の中でBSCが目にとまり、興味津々。「この金色のモデル、ちょっと面白いデザインですね…」

金色のモデル、というのは、BSCの誇る最高峰501G。ベルに延座がなく、ベルU字管に「背骨」があり、

ベルには「メダル」が貼ってあるように見える…マニア心をくすぐる、そんなデザインがYOKAN氏の心を捉えたようです。あのウィントン・マルサリスも激賞した、というこのモデルをまず吹いたYOKAN氏は、その演奏感にいたく感心。そこで他のBSCはどんな感じかな、とおっしゃるのずらりならべてみたところ、次のような感想を、ぽつりと。「ぼっと見ただけじゃ、501G以外は違いがわからないや…」

## 「目隠し」状態で吹いてみた

確かに501G以外のBSCは、リードパイプの刻印以外の場所ではほとん

ど見分けがつかないのが外見的特徴。それでいて、実際に吹いてみると驚くほどそれぞれに個性的、というのがもっぱらの評判なんです、と告げると、

「だったらなにがどう違うか、お聞きする前に吹いてみたいな」

つまり「目隠し」こそしないものの、「目隠し」されたのとほぼ同じような状態で4本のBSCにチャレンジしてみよう、というわけです。

でもって、「これ、スキ！」という順に並べてもらったのが上の写真。501G以外は、確かにどれがどれやら判りません。

「501Gは図抜けてよかったです。これは他のものとは別、って感じでした。音色の幅も深し、抜けもいい」

そして意外なことに、501Gの次に「いい！」と感じたのは、もっとも低価格な1055「ミレニアム」。

「なるほど、2000って刻印がありますね。だから『ミレニアム』なのか(笑)。とても吹きやすいし、よく鳴りますね!あ、だからといって他のものが鳴らないわけじゃありませんよ」

YOKAN氏によれば、501G以外のモデルはどれも2つの系列に分かれるみたいだ、とのこと。ご担当者に問い合わせたところ、確かに銀メッキの4モデルはそういう感じだそうで、1055「ミレニアム」と303S「シンフォニー」という2つが同じ系列で、206S「オールラウンド」と106S「ニューヨーク」というのがもうひとつの系列、という具合に分けられるとのこと。それを聞いて、YOKAN氏はいっさり。その分類が、きっちりYOKAN氏の好みとあっていたので、です。

## BSC CATS

### ソロが吹いてみたくなりました

北海道は札幌市の郊外に、空知郡南幌町という町がある。キャベツの名産地として有名で、このところ「キャベツのキムチ」がひそやかにブームを呼びつつある、そんな元気な町だ。この町では、社交ダンスや各種の催しの際にひっぱりだこの人気アマチュアビッグバンドがある。今回ご紹介する渡辺広貴さんはそのバンドリーダーにして、リードトランペッター。昭和46年に北海道は岩見沢で生まれた渡辺さんは、小学校時代の金管バンドから喇叭(らっぱ)に親しんできた生っ粋の楽器族。大学を卒業するまではどっぷりと吹奏楽に浸る楽器生活だった。ビッグバンドへの転向は、こちらに就職してから。「町の有志が集まって、バンドでも造れないか、という気運が高まってきたんですね。それで経験のあるものを中心となって出来上がったのが今のバンドなんです」

そのバンドは、全国的に見てもユニークな名前なのだが、それは後に回してとりあえず本題。なにしろこのところ渡辺さんはBSCの最高級モデル501Gを入手して意気軒昂なのだ。「これを見つけたのは、札幌の三響楽器さんでした。それまで使っていた楽器がくたびれてきて、新しいものを探していたところに、BSCがたくさん入荷してきたんですね」

つまり「スキ」な順に並べると、1055「ミレニアム」303S「シンフォニー」206S「オールラウンド」106S「ニューヨーク」という順。「だけど最後の『ニューヨーク』が駄目、といっているんじゃないかと、あくまでもわたしの好みの問題。どれ

最初は銀メッキのモデルにしようと思ひ、そちらを中心に試奏していた渡辺さん。いずれのBSCも吹奏感はなかなかのものだったらしいが、同行した楽器仲間には、いまひとつ吹いている本人程にはその違いが伝わらなかったらしい。

「そこで、ちょっとこの金メッキの楽器を試してみるか、と思ったんです。ベルの延座の位置もユニークで、気になっていたんで…」

で、吹いてみた。と、店内の誰もがその音色の違いに驚いた、という。「それまではウルサイ!と言われることが多かったんですが、この楽器ではどんなに息を入れてもうるさくならないんです。音量はたっぷりと鳴ってくれる上に、決してうるさくない…驚きました」

一緒にいた友人も大賛成で、めでたく渡辺さんはBSCの最高峰501Gのオーナーとなったのである。「これまではあまりそういう気持ちにならなかったんですけど、前に立ってソロが吹きたくてきましたよ」

そう語る渡辺さんが率いるバンドは、その名前からしてユニークだ。ヒト呼んで「ぼうふうりん」。まさかアレじゃないよね…なんて思う方もいるかもしれないので念のために漢字で書くと「防風林」。そう、文字どおりアレなんです。荒っぽい浜風を防ぐ、あの「防風林」。1997年10月に南幌町民バンドとしてスタートしたのがその歴

も楽器としてはすばらしい。大事なものは、これだけ見かけが同じで、こんなにはっきり『好み』が分かれる、ということ。これはぜひ実際にお店で吹いて、自分の『好み』がなんなのかを自分で探ってみてほしいですね。ここでミレニアムがこんな感じ



渡辺広貴さんと、新たな愛器501G。「ぼうふうりん(Bキューブ)」のhpは下記の通り  
<http://www.atbtw1175.com/bcube/>

史の始まりで、おそらく全国的に見ても珍しい名前である。現在はBig Band Boufulinと、英語で書くと頭文字がBとなる単語が3つ続くことを理由に新たな愛称をつけた。Bの3倍、つまり頭文字の「B」に、さらに「立方体」を意味するCubeをつけて「ビーキューブ」。通常のビッグバンドジャズにくわえて、演歌やダンスミュージックなど、幅広くエンターテインメント性の高いレパートリーを自家業籠中のものにしていく。さまざまなイベントでナマバンドのダイナミックな音色が楽しめるのだから、南幌町のみならずは幸せである。次回のリサイタルは、11月23日。渡辺さんの501Gの音色が、地元南幌町の「農業改善センター多目的大ホール」に響くはず。

「あ、まだソロやるって決まったわけじゃないので(苦笑)」

大丈夫、501Gなら絶対頼りになりますから。

で、ニューヨークがこうで…と書いてしまうのは簡単だけど、誤解も生じる。吹いてみればこの違いは判ります。不思議ですね、見かけが同じでもこんなに違って感じる、というのは。見かけも大事だけど、見かけだけじゃない、ってことですかね」